

読書感想文をめぐる言説空間の社会学的研究

京都大学大学院 磯辺菜々

1 目的

この報告の目的は、読書感想文をめぐる審査員や教員らの言説を読み取ることで、教育者らの児童の作文に対する評価軸や児童へのまなざしを明らかにすることである。特に戦後 60 年以上にわたって広く支持されてきた「青少年読書感想文全国コンクール」（以下、コンクール）が教師や主催者によってどのように語られ、学校教育に浸透していったのか、またコンクールの応募にあたって教師はどのように児童に読書指導や作文指導を促してきたのかを概観する。

2 方法

そこで、データとして以下の二点の資料を取り扱う。一点目は毎年発行のコンクール入選作品集『考える読書』、二点目は主催元である全国学校図書館協議会によって毎月発行される機関紙『学校図書館』である。

入賞作品集『考える読書』では、主催かつ中央審査員を務める全国学校図書館協議会の委員が、その年のコンクールの全体的な傾向や、受賞作の評価を述べている。また、時に学校の指導者に向けて読書感想文指導の要望を示すこともある。これらに関して、主に小学校の部における記述を収集し整理する。

機関紙『学校図書館』では、コンクールに関する特集記事や、教育委員会や教員らによる意見文の寄稿や座談会などの形で、頻繁に議論が展開されている。そこで、読書感想文の意義や功罪という「理念」面と、学校における読書指導・作文指導の実践報告といった「実践」面の双方から、教師らの読書感想文に対する語りや「意識」を抽出する。

3 結果

分析の結果、審査員らの語り、教育者らの語りそれぞれに関して以下のことが明らかとなった。

- ①審査員の評価、価値づけの論理…それぞれの時代の教育における問題意識を解決する手段の一つとして読書感想文の価値を見出そうとする語りが見られた。また児童の感想文評価については、技巧的な表現を用いる感想文を「教師の手が介入したもの」として嫌い、「自由にのびのびと」「素直に感動・共感して」書かれている「子どもらしい」作品を称揚する傾向が見られた。
- ②教育者らの理念や実践…児童に対し、感じたままをそのまま書かせるような情緒を重視するタイプと、文章をフォーマットに基づいて明確な文章を書かせようとするタイプとが見られた。感想文の意義だけでなく、子どもをかえって本嫌いにするなどの課題についても積極的に議論された。

4 結論

以上から、読書感想文コンクールにおいて、戦前の童心主義や綴方教育にも通底するような「近代的孩子観」を下敷きにした、「見えないルール」が審査員や教育者らの間に存在することが示唆された。また、コンクールが戦後 60 年以上にわたり実施されていく中で、読書感想文の狙いや指導方法は、各年代に応じた教育の問題意識や期待感を反映していることがわかった。